

## 短歌選後感

著者	上田，英夫
雑誌名	龍南
巻	1 9 9
ページ	7 3 - 7 3
発行年	1926-11-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/8884">http://hdl.handle.net/2298/8884</a>

## 短歌選後感

上田 英夫

私はもうここ数年間諸君のお歌を拜見して來てゐるが今年ほど短歌の振はなかつたことはいまだかつて知らない。これまでの短歌は、應募者はいつも多士濟々であり、又作品の出來榮も、他の方面に比べていつも一頭地を抜くといつてもいい位の立派な成績を示してゐたものだ。しかるに今年度のこの有様はどうであらう。量に於ても質に於てもまことに情ない貧弱さである。

應募僅かに四篇。そのうちで採れさうなのが『悟眞寺閑居』と『朝の蜻蛉』とであるが、これらとても例年のにくらべればやうやく中位の代物である。前者は、調子は低いが、對象の捉へ方表し方が確かである。掴むべきものを相當に攔んでゐる。後者は、前者に比して若々しさがあり自由さがある。平淡のうちに感覺の新鮮さと情緒の細やかさが看取される。素直な感情を靜かにそして比較的確かに詠んでゐる。四人のうちこの作者が最も將來を思はせる。『夏の川原』『傷める心』は、前の二篇に比して遙かに見劣りがする。批評するまでもないといふ氣がする位の幼稚さである。『夏の川原』では、『妓王を

よむ』が少ししいが、あとの三十三首は感じが概ね平俗皮淺であり、表現が安易に墮してゐる。觀照が粗策であり主觀がだれきつてゐるから、歌に律奏がなく生動するところがない。啄木の歌集位を一通り讀んだものか（味はつたものとは言へない）、形式にも内容にも啄木臭い所が少くない。毎年のことだが、どうも下手な人に限つて啄木臭い歌を作るやうだが、地下の啄木もさぞ苦笑してゐることであらう。三年や五年歌に苦しんだ位では本當の啄木は中々解るものではないのである。『傷める心』にも啄木臭がある。安價な感傷主義に於て、一寸啄木を眞似ようとした跡がある。啄木にも感傷は無論あるが、決してこの作者のやうな安價さではないのである。この作者には又感じ方が常議以上に一步も出てゐない歌があるかと思へば、又一方にひどく獨りよがりな歌もある。しかし『夏の川原』の作者よりはほんの少しだがいゝ所を持つてゐるやうだから勉強次第では段々わかつて來るやうになるだらう。（了）